

サッチーが水着になった遊園地

としまえん

TELEPHONE



西武の電車で池袋から魔法の旅へ

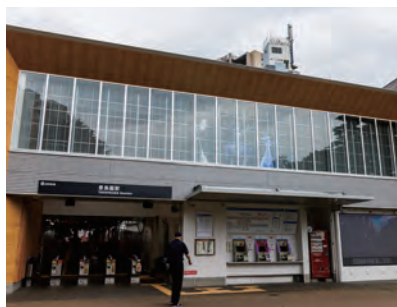
池袋駅から、西武線に乗ろう。

行き先は多岐にわたる。特急ラビューが秩父を指すかと思えば、飯能行きの特急や準急も走る。二〇〇八（平成二十）年に練馬駅を介して地下鉄副都心線との直通運転がはじまってから、快速急行は地下鉄経由。ターミナル・池袋を発する電車は、各駅停車が中心になっている。

池袋駅から走る各駅停車は、平日の昼間だったら一時間に八本も。そのうち半分の四本が、豊島園駅行きだ。池袋から豊島園までは十五分。その短い道のりは、まるでハリー・ポッターの世界に誘われるような旅である。

まず、池袋駅のホームからして特別な設え。やってくる電車もハリー・ポッターのラッピングが施されているし、到着する豊島園駅ともなると、ますますムードが高まってくる。ホグズミッド駅をイメージしたというホームでは、受話器を取るとちよつとした仕掛けを楽しめる電話ボックスや、空から舞い降りる魔法列車が出迎える。改札を抜けてからも世界観は変わらず統一されていて、駅前広場の電話ボックスの中にはナゾのトランクと足跡が……。

こうして期待感が高まったまま、豊島園駅の駅前広場のすぐ先にあるエントラ



豊島園駅の入口

ンスから少し進んで石神井川を渡れば、そこにあるのがハリー・ポッターのテーマパーク「スタジオツアー東京」だ。いつしか、池袋から豊島園に向かう黄色い電車は、ハリー・ポッターの世界観に覆われた、魔法の列車に生まれ変わったのである――。

かくのごとく、豊島園駅はすっかりハリー・ポッターの聖地になっている。スタジオツアー東京の中で足を伸ばすことはしなかったけれど、西武線の豊島園駅に降り立つだけでもそうしたことは十分に理解できる。コスプレを楽しんでいる人の姿も見かけるし、駅の脇の映画館ではハリー・ポッターの過去作を上映していたり。まあとにかく、どこを切り取ってもハリー・ポッターファンにはたまらない駅、豊島園なのだ。

そして、表面的にはほんの数年前までここにザ・昭和の遊園地「としまえん」があったことなど、もはや想像も及ばない。スタジオツアー東京ができてからはじめてこの町にやってきた人もいるに違いない。逆に、としまえんがなくなつたから、この町に来なくなつたという人もいる。後者の人たちが、いまの豊島園駅を見たら、びっくり腰を抜かしてホームのベンチにへたり込んでしまうかもしれない。

あの、古き良き遊園地、としまえんは、いったいどこへ。魔法の世界と昭和の



豊島園駅ホーム上のベンチはとしまえんで使われていたもの



豊島園駅ホームの魔法列車

遊園地、それはまったく、似ても似つかぬ世界観。

などといっても、よくよく探してみれば、まだまだ本質的にはこの町が「としまえん」の町であることは変わっていないようだ。

ハリー・ポッターの世界観といながらも、駅前から豊島園通りまで抜ける細い道沿いの小さな商店街は相も変わらず庶民的だし、少し駅前から足を伸ばして歩いても、牧歌的な東京郊外の住宅地としての空気感も変わっていない。だからこそ、ハリー・ポッターの世界観になっているところが目立って感じられるのだろうか。いずれにしても、駅の名前はいまも変わらず「豊島園」。魔法の世界の中に、かすかに残るとしまえん。時代はそう簡単に、過去を一掃してすべてを変化させるような野暮なことはいらないものである。

奇抜な広告に世界最古級の回転木馬

「としまえん」とはいったい何だったのだろうか。

個人的な思い出を語れば、一九九八（平成十）年頃だっただろうか、サッチーが水着姿でとしまえんの広告に登場していたことが印象に残っている。「水着で乗れるとしまえん」なるキャッチフレーズがセツトになっていたはずだ。

サッチーとは、野村克也監督（当時ヤクルト）夫人の野村沙知代さん。この頃、サッチーはやたらと

テレビに登場して、バラエティタレントのごとく活躍していた。ちなみに、伝説の「ミッチー・サッチー騒動」が世間を賑わすのは、一九九九（平成十一）年のことだ……って、覚えてる人、いますかね？とにかく当時のサッチー、齢六十六歳。としまえんという遊園地は、ずいぶんと奇をてらったことをするものだと感心したというか、あつけにとられたというか、まあそういう気持ちになったことを覚えている。

としまえんの奇抜な広告は、サッチーばかりではない。個人的にはあまり記憶にないけれど、水着サッチーなんてまだまだ軽い方といったほうがいいかもしれない。

たとえば、一九九二（平成四）年には「豊島園に、サンタフェの扉が、やってきた!!」。前の年、宮沢りえのヘアヌード写真集「Santa Fe」が話題を呼んだ。それをさっそくイジったというか、あやかっただけである。家族連れから中学生や高校生までたくさん訪れる遊園地にサンタフェって、いまの時代ではあれこれ難癖をつけられて炎上しそうである。

二〇〇八（平成二十）年は「冷し温水」、二〇〇九（平成二十一）年には「プールで、やく。」。前者は俳優の温水洋一、後者は漫画家のやくみつるが登場したタレントイジリパターンだ。二〇一〇（平成二十二）年には、デーブ・スペクターに「一刻も早くすべりたいです」と言わせている。

水着サッチーと似たようなものでは、二〇一〇（平成二十二）年の「TSM



1992年の広告。中央が「サンタフェ」の扉

48」がある。プールサイドに水着姿の中年女性がずらりと並んで、“年増”にかけた“TSM”。もちろんAKB48にあやかっただけのものだ。これもサンタフェ同様に、いまだつたら許されなさそうな広告である。

ほかにも取りあげたい個性的な広告はいろいろあるが、これくらいにしておこう。いずれにしても、としまえんはこうした変わった広告のおかげで、他の遊園地やテーマパークの中に埋没せず、行ったことがなくても知っている、くらいの存在感を保つことができたのであろうことはまちがいない。

もちろんヘンな広告だけではなく、施設面もなかなか充実していた。とりわけプールは一九二九（昭和四）年に設置されてからの名物で、一九六五（昭和四十）年には世界ではじめてとなる流れるプールが登場、大型ウォータースライダーの「ハイドロポリス」なんかも最後の最後まで人気を集めていた。水着サッチーの広告のとおり、水着のままプールだけでなく園内を楽しむことができるのもとしまえんの特徴で、夏場には水着姿の若い男女で大賑わい。文字通りの“芋洗い”状態であった。

アトラクションはジェットコースターからお化け屋敷、スカイトレインなどなど、定番ものがしつかり揃っていた。「カルーセルエルドラド」は一九〇七（明治四十）年にドイツ・ミュンヘンで製造されたという、年季の入ったメリーゴーラウンド。レトロなデザインと積み重ねてきた歴史が人気を呼び、二〇一〇（平成二十二）年には「機械遺産」に認定されている。としまえんにやってきたのは一九七〇（昭



としまえん最後の広告

和四十五）年で、それ以前は長らくアメリカ・ニューヨークで活躍し、マリリン・モンローも乗ったことがあるのだとか。日本では最古、世界でも最古級のメリーゴーラウンドだった。

実業家の奉仕の心がとしまえんを生み出した

としまえんは、一九二六（大正十五）年に開園した。

開いたのは実業家の藤田好三郎。藤田自身の別荘地として練馬城址石神井川以南の土地を購入し、休日には家族で訪れていた。園芸施設などを整えたのも最初は自分と家族のために。しかし、藤田は考えを変えて、一般に公開して誰もが楽しめる景勝地にすることを決意する。

東京都心の人口密集が進み、さらに一九二三（大正十二）年の関東大震災以降は郊外に人が流れた。そうした社会状況を受けて、藤田はこの土地を個人利用するのではなく、市民に広く開放したいと考えたのだ。そして、石神井川以北の土地も借り入れて、約一〇万坪の敷地で遊園地を整えた。設計を担ったのは、造園家の戸野琢磨。開園時の名称は、「練馬城址豊島園」といった。

藤田が豊島園に託した思いは、「黄塵万丈の非衛生の東京に於ける小学児童の為に、健康と快樂を与へたい」「公衆に対して簡単に運動場を提供したい」「園芸趣味を鼓吹し、心行くばかり日光と土に親しましめたい」という三大目的に集約される。この時代の実業家、つまりオカネモチの方々は、自らの資産を活かして社会に奉仕しようという意識を持っていたのである。

一九二六（大正十五）年の開園は部分開園で、一九二七（昭和二）年四月二十九日に全面開園を果たす。当時の遊園地はスリル満点のアトラクション中心ではなく、ちょっとした公園に毛が生えたようなもの。石神井川とその両岸の丘陵という自然の地形を活かした景勝地としての整備が中心だった。それでも、園芸施設に音楽堂、野外劇場、ウォーターシュートを完備したプールまで揃っていた。陸上競技場や野球場もあって、野球場では六大学の対抗戦も行われたそうだ。

開園時からシンボルになったのは「古城の塔」。当初は食堂として使われていた、イギリスの古城をイメージしたという建物だ。すっかりすべてが消えてしまったいまのときまえんにあっても、古城の塔だけは残されている。

全面開業からおおよそ半年後の一九二七（昭和二）年十月には、武蔵野鉄道（現・西武鉄道）豊島園駅も開業する。武蔵野鉄道にとっても、沿線の行楽地への輸送によつて収益を確保しようという狙いがあつたのだろう。こうして交通の便も整って、ときまえんは開園当初から東京近郊の行楽スポットとして人気を集めるようになってゆく。

この当時のときまえんについて、雑誌『武蔵野』は次のように書いている。

「曠野に聳ゆる一圓の松林中に、隠見する古城は異國情緒をそそり、好奇の眼をみはらせる。コンクリートで固めた古城建築の展望台に登れば、富峰につづく秩父日光の連山が一眸のもとに眼界に収まり、武蔵野特有の曠野が周囲に展開し来る」

いまでこそ、としまえんの周囲は住宅地、どこまでも続く大都市・東京の一部に組み込まれてしまっただが、当時はまだまだのどかな郊外の田園地帯。眺望を遮るようなものもなく、絶景を楽しむことができたのだろう。

流れるプールもスリルマシンも年間パスも

藤田好三郎は、“本業”の樺太工業の経営が不況によって行き詰まり、としまえんも一九三二（昭和七）年には債権者の安田信託銀行の手に渡る。銀行としては、債権の担保なのだからとっと売り払うか住宅地でも造成しようと考えた。しかし、藤田の想いを託されていたのか、それとも自らの目でとしまえんを見て感動したのか、担当した小川栄一は売却を良しとはしなかった。それどころか、もつと遊園地として発展させて、多くの人が遊べる施設にしようと思論んだ。

小川は一九三五（昭和十）年に日本企業株式会社を設立し、としまえんの経営を担う。安田信託銀行も一行員だった小川の取り組みを認めてくれたのだから、当時の銀行はだいぶおおらかだったようだ。

一九三六（昭和十一）にはリニューアルを行い、以後は豆汽車や飛行船などのアトラクションも充実させてゆく。化粧品メーカーとのタイアップイベントを行ったのも、この時代にしては珍しい。最初は藤田のいわば慈善事業のような形でスタートしたとしまえんも、小川の経営手腕で軌道に乗り、

一九四〇（昭和十五）年頃には黒字に転じていた。

そして、一九四一（昭和十六）年、日本企業は武蔵野鉄道と合併。それから閉園まで、運営体制は何度かわったものの、一貫してとしまえんは西武グループのレジャー施設として歴史を刻むことになる。

戦後はアトラクションを中心にめざましい充実ぶりを見せてゆく。一九五一（昭和二十六）年には日本初のモノレール「空飛ぶ電車」が登場。一九五七（昭和三十二）年にオープンした「豊島園昆虫館」も日本初の本格的な昆虫館。一九六五（昭和四十）年に登場した「流れるプール」は日本どころか世界で初めてだった。メリーゴーラウンド「カールセルエルドラド」は、一九七二（昭和四十六）年にとしまえんに移設されている。

一九七七（昭和五十二）年には、遊園地では初めてとなる「年間パス」制度を導入した。年間会員制度「木馬の会」で、これも閉園まで続くとしまえんの定番のサービスになった。大型テーマパークを中心に定着している年間パス、そのはじまりはとしまえんだったのだ。なんでもかんでも、としまえんは「遊園地」



2019年撮影の航空写真。中央がとしまえん

という世界において、一歩先を行くリーディングカンパニー。そういう存在だったのである。

一九七〇年代後半からは、コークスクリューやハイドロポリスといった、スリル性を高めたアトラクションが増えてゆき、スリルマシンプームに先鞭をつけたのもとしまえん。一九八三（昭和五十八）年には東京ディズニーランドが開園して、テーマパーク時代が幕を開けるが、それでもとしまえんの人気は衰えず。バブル景気の後押しもあって、一九九二（平成四）年度には年間入場者数三九一万人の最多記録を更新している。

非日常のとしまえん、静かな日常の住宅地

いまのとしまえんの周辺を歩こう。

豊島園駅の駅前広場から、東に小さな商店街を抜けて豊島園通りに出ると、大江戸線の出入口が見えてくる。商業エリアとして活気づいているのはこのあたりのごく狭い範囲に限られていて、ほとんどは住宅地だ。としまえんは、住宅地に囲まれた遊園地だったのである。

とりわけとしまえんの南側。この一帯は、としまえんのプールエリアに近いというのに、まったく園内の喧噪とはほど遠い、閑



駅前の商店街

静な住宅地である。それぞれの家には大きな庭が付属しているからか、緑も多く、夏場でも日陰が多くて歩いていて気持ちが良い。どの家も、なかなか長い歴史を持っていてような立派な御邸宅ばかりだ。

としまえん南側の住宅地の歴史は、実はとしまえんよりも古い。としまえん開園に先立つ二年前、一九二四（大正十三）年に城南住宅組合が設立されたのがはじまりだ。当初の組合委員は十二名、七ヘクタール四十四区画。理想的な郊外生活を望む人々が、都心から少し離れたこの場所に理想郷を求めたのだとか。としまえん創業者の藤田好三郎が、まだこの地を別荘地にしていた頃のお話である。

ちなみに、「城南」という名称は、練馬城の南にあることからとったものだという。一般的に、東京における「城南」は、大田区や品川区、目黒区などを指すことが多い。このときの「城」は皇居だ。そんな潮流に抗って、練馬城の南で「城南」。このあたりからも、この地に理想の暮らしを求めた人たちの強い思いが伝わってくる。

設立から一〇〇年が経っても、形を多少変えながら、城南住宅は命脈を保ってきた。一九七〇年代には、昭和初期に鉄道大臣江木翼の邸宅だった土地を不動産会社が取得し、マンションを建設する動きがあった。しかし、住環境維持に尽力してきた城南住宅組合の人々は、マンション建設に強く反対。結局マンション建設は白紙に戻り、その予定地は練馬区立の向山庭園としていまは一般にも公開さ



石神井川ととしまえんに向かう橋



「城南」の住宅街

れている。

そんな静かな城南住宅の一角を抜けて、としまえんのプールと住宅地を隔てていたフェンスの脇を歩いてゆくと、石神井川を渡る小さな橋へ。

石神井川は、小金井公園付近を源流として練馬・板橋区内を流れ、飛鳥山公園を過ぎたところで隅田川に合流する小さな川だ。としまえんは、この石神井川を中心に北と南に敷地を広げていた。いま、石神井公園北側は、早くも練馬城址公園として広々とした公園に生まれ変わっている。

としまえんが開園するよりも遥か前、この一角には言葉通りに練馬城というお城があった。中世、豊島氏という一族の居城だったという。練馬城は太田道灌に攻められて一四四七（文安四）年に落城し、それきり歴史から姿を消している。武蔵野の雑木林、というのがそれから六〇〇年にわたる練馬城址の姿だった。それをとしまえんとして蘇らせたのが藤田好三郎、というわけだ。豊島区ではなく練馬区なのにとしまえん、の理由は、豊島氏にちなんだからなのだ。

そんな公園も、いまは住宅地に囲まれている。住宅地と公園の間を歩いて行くと、武蔵野の面影を感じる雑木林があつて、その奥に見えるのがスタジオツアー東京だ。二〇二〇（令和二）年八月三十一日、コロナ禍の最中にとしまえんが閉園し、その跡地の一部に二〇二三（令和五）年六月十六日にスタジオツアー東京がオープン。隣接する練馬城址公園は、同年五月から一部が開園している。



城南の住宅地の中にある向山庭園

悲しくも、コロナ禍に消えた、としまえん

一九九〇年代後半から、日本各地の“昔ながらの遊園地”が次々に閉鎖に追い込まれた。バブル崩壊後の長引く不況で客足が遠のき、そこにディズニランドやU.S.Jをはじめとする“テーマパークの時代”が襲いかかった。富士急ハイランドのようによほどのスリルに全振りするといった、唯一無二の個性がなければ生き残れない時代。そのように言われたりもした。としまえんと同じ西武グループの西武園ゆうえんちも、二〇二一（令和三）年にレトロテーマパークとしてリニューアルしている。

そうした文脈で、としまえんも経営難から閉鎖になったと知っている人がいるかもしれない。

しかし、実際はそうではない。むしろとしまえんは、他の遊園地と比べても堅調だったといっている。一九九二（平成四）年のピークには遠く及ばなくても、毎年コンスタントにお客がやってくる。都心に近いという立地のおかげか、インパクトたっぷりの広告のおかげか、プールをはじめとする充実した施設のおかげか。それでも閉鎖されたのは、練馬城址公園の整備のためだ。

二〇一一（平成二十三）年の東日本大震災以降、東京でも避難場所や防災拠点として活用できる広大な公園を整備する動きが進んでゆく。そのひとつとして、



いまはハリー・ポッターの町

としまえんを防災公園化する計画が持ち上がる。すぐにはまとまらなかったが、ワーナー・ブラザーズがテーマパーク建設を提案したことから話が具体化。二〇二〇（令和二年）八月末でのとしまえん閉園と、その敷地の一部にテーマパーク（スタジオツアー東京）、残ったところに練馬城址公園という計画がまとまった。

だから、としまえんは決して“斜陽”だったわけではない。むしろ、まだまだ人気を集める中で、多くの人に惜しまれつつの閉園になった。防災公園の必要性は言うまでもないのだから、やむを得ないといったところだろう。

少なくとも、タワーマンションか大型ショッピングモールのような縁もゆかりもないものになったわけではないのだから、良しとしなければなるまい。唯一残念なのは、コロナ禍真っ只中での閉園になってしまい、入場制限のもとで最後の夏を過ごしたことが。思い出のプールを楽しめずに終わってしまったとしまえんファンがたくさんいたことは間違いないだろう。

としまえんの非日常性はスタジオツアー東京に受け継がれ、周囲の住宅地はいまも変わらぬままだ。そして、豊島園の駅に戻ってくる。この駅のホームに置かれている電話ボックスやベンチは、かつてとしまえんの園内で使われていたものだ。魔法列車も、豊島園の模型列車をリニユアルして再利用している。地元の人が駅にやってきて、このベンチに座って「あれ、としまえんのベンチじゃない？」と座り心地だけで気がつくこともあるという。それだけとしまえんが愛されていた証左だし、その愛されたとしまえんの痕跡は、いまでも確実に受け継がれている。

地方競馬の希望の星はホリエモンか、
それとも……

高崎競馬場



時代の寵児・ホリエモンが現れた二〇〇四年

いまから二十年ほど前、二〇〇四（平成十六）年はどんな一年だったのか。どれくらいの人が覚えて
いるだろうか。

時の内閣総理大臣は小泉純一郎。かの「郵政解散」は次の年、二〇〇五（平成十七）年のことだ。い
までは「旧紙幣」と呼ばれるようになってしまった、福澤諭吉・樋口一葉・野口英世の肖像画を使った
紙幣が発行されたのもこの年。『冬のソナタ』の大ヒットで韓流ブームが巻き起こった。いちばん大きな
できごととは、十月二十三日に起きた中越地震だろうか。死者は六十八名に及んでいる。

スポーツ界では明るい話題も多かった。イチローがメジャーリーグでシーズン最多安打の記録を更新
したし、アテネオリンピックではメダルラッシュ。北島康介の「チョー気持ちいい」が流行語大賞を受
賞している。

と、ざっと振り返ってみたところで、やはりスポーツ界、とりわけ野球というジャンルに限れば、こ
の年いちばんの話題は「球界再編」だ。

六月十三日に近鉄とオリックスの合併計画が明らかになり、そこから波及して球団数削減やら一リー
グ制移行やら、大騒動に発展した。ナベツネこと渡邊恒雄巨人軍オーナー（当時）が、「たかが選手が」
と放言して批判を浴びたのもこの騒動の最中だし、アマ選手に裏金を渡していた一場事件が発覚したの
いちば

もそうだ（一場事件でナベツネさんはオーナー職を退いている）。

結局、古田敦也選手会長の奮闘と史上初のストライキもあって、一リーグ制に移行することはなかった。近鉄とオリックスは予定通り合併したものの、新球団・楽天が加わって二リーグ制が維持された。同時にセパ交流戦の導入が決まるなど、球界の構造改革も進み、いまに続いている。

この球界再編騒動の真っ只中に、突如として世に名を知らしめて時代の寵児^{ちようじ}になった男がいた。当時、ライブドア社長の堀江貴文、ホリエモンである。

ホリエモンは、近鉄球団を買収する用意があることをアピールし、ファンから喝采を浴びた。新規参入にも手を挙げている。結果としては楽天が新規参入球団に決まったのだが、少なくとも野球ファン、とりわけ近鉄ファンにとっては“救世主”だったことは間違いない。旧態依然とした組織に新風を吹き込み、改革してくれる——。そんな期待感が膨れ上がっていたことを覚えている。

そして、時代の寵児・ホリエモンが首を突っ込んだのは、野



1980年の航空写真。左はJR高崎駅。

球界だけではなかった。地方競馬の世界にも、ホリエモン旋風が巻き起こっていたのである。その震源地は、群馬県高崎市、高崎競馬場である。

いったいこの年の高崎で何が起きたのか。それを知る前に、まずは高崎に向かおう。

高崎という町は、中山道が通る古くからの交通の要衝であった。東西南北から物資の集まる経済都市で、明治に入って鉄道の時代になると、いち早く高崎線が開通している。次いで信越本線や上越線も開通し、高崎は信越方面と首都圏を連絡する主要路線が交差するターミナルになった。

一八七二（明治五）年には、近隣に富岡製糸場が開設されている。明治初期の日本にとって、数少ない外貨獲得手段であった生糸の生産地として、高崎をはじめとする両毛地域は日本の生命線でもあったのだ。

だから、というわけでもないだろうが、経済都市・高崎はいまも県庁所在地の前橋市を凌^{しの}ぎ、群馬県内ではいちばん人口の多い都市だ。高崎競馬場は、そうした都市の一角にあった。



2020年の航空写真。高崎競馬場跡地の周囲はほぼ住宅街になっている

コンベンションセンターと傍らの場外馬券場

高崎の中心市街地は駅の西側、碓氷川との間に広がっている。高崎競馬場があったのはその反対、高崎駅東口側だ。

東口の駅前には、ヤマダ電機の「LABII高崎」。実はヤマダ電機は群馬発祥で、本社も高崎駅前のこのビル内に置かれている。ヤマダ電機の前を抜け、駅前目抜き通りの上空にまで続くペDESTリアンデッキを歩いてゆくと、今度はビックカメラが見えてくる。ビックカメラといったら池袋のイメージが強いが、これまた実は高崎が発祥の地なのである。

と、いきなりまったく競馬場とは無関係の家電量販店トリビアが続いたが、高崎競馬場の跡地はもう少し目抜き通りを東に進んだ先を右に折れたところにあった。ペDESTリアンデッキが途切れる高崎芸術劇場の前から少し歩き、まったく新しく整備された大きな道を曲がれば、そこが高崎競馬場の跡地だ。

ただし、いまそこにあるのは競馬場とはまったく縁遠そうな立派な建物だ。Gメッセ群馬と名付けられたコンベンションセンターである。二〇二〇（令和二年）にオープンしたばかりの、比較的新しい施設だ。コロナ禍の最中にオープンし



ペDESTリアンデッキ



J R 高崎駅東口

たということもあって、最初のビッグイベントは新型コロナワクチンの集団接種会場。東京オリンピックの聖火リレーセレブレーションも行われている。

Gメッセに、競馬場時代の面影はどれほど残っているのだろうか。

Gメッセの外周を歩くと、これがまた存外に競馬場時代の痕跡があつた。

そもそも、Gメッセ西側の外周が競馬場時代の三・四コーナーのそれとまったく同じ、そのままなのだ。外周はランニングコースのようになっていいるから、ぐるりと一周歩くことができる。東側は駐車場になっていて面影は乏しいが、西側は芝生まで整備されて歩きやすく、往年のままの三・四コーナーを感じることができる。

現役時代、高崎競馬場は一周一二〇〇メートルの右回り。直線コースは三〇〇メートルという、地方競馬場にしては標準的だが、JRAの競馬場比べるとだいぶ小さい。Gメッセ群馬は、そんな競馬場の跡地にすっぽりと収まるように建てられたことになる。

外周を歩いて馬の気分になって、ちょっと走ってみたりして。といっても、目の前にあるのは巨大で真新しい、地方競馬の持っていたであろう殺伐感とは似ても似つかぬGメッセ。形ばかりは残っていても記念碑のひとつもあるわけでなし、雰囲気という意味では痕跡は消え失せた、というのが正しいところだろうか。



競馬場のコーナーを利用した遊歩道



Gメッセ群馬

それでも、Gメッセのエントランスの傍らに、ちゃんとありました。B A O O 高崎という、場外馬券売り場。J R A の馬券も売っているが、どちらかというと地方競馬の馬券が中心だ。いまだきネットで馬券を買う人がほとんどだろうから、わざわざB A O O 高崎に足を運ぶ人は少数派に違いない。ネット環境にない人が不慣れな人か。いずれにしても、現役時代の高崎競馬場にも通っていたような人たちが、B A O O 高崎にやってくる。

現に、B A O O 高崎はGメッセの清新な雰囲気とは裏腹というか、バランスが悪いというか。もともと競馬場が先にあったのだから、B A O O 高崎の雰囲気のほうが本来のそれ。けれど、Gメッセができたいまとなつては、B A O O 高崎のほうが異物感が強い。知らずにここに来た人は、B A O O 高崎を見て、「なんだこれ」と顔をしかめるかもしれない。

そういう理由からなのだろうか。B A O O 高崎は高いフェンスで覆われていて、Gメッセ側とは明らかにつきりと隔てられている。隔離されているといったほうがいくらいだ。おかげで、入口がどこなのかもよくわからない。建物の裏手から、フェンスのスキマを縫って入り込むのが正解らしい。

このあたり、いかにもお役所のやりそうなことだなあとthinkもなくもない。もちろん、競馬場という施設があまり地域に歓迎されない側面があることは事実だ。そして付け加えれば、高崎競馬場のような公営競技が、地方都市を震災から復興させる原動力になったこともまた、紛れもない事実である。



B A O O 高崎

群馬県民は古代からの生粋の“馬好き”？

群馬県、すなわち上州は、古くからの馬産地だった。平安時代から山間部に「九牧^{きゅうぼく}」と呼ばれる牧場が開かれ、毎年五十頭以上の馬が朝廷に献上されていたという。関東平野から山を越えて信州はたまた越州へ通じる要衝だから、古の交通の担い手だった馬の生産を盛んにしたのだろうか。ちなみに、「群馬」の由来もこの地域に馬が多かった（群れていた）からだとか。

そうしたわけで、近代競馬が全国に波及すると、この地域に競馬場が設けられるのも必然だ。『地方競馬史 第二巻』には、「上州人は多くの人が馬好きであって、これが競馬好きにつながり、現在では射幸心の強さが県民性の一つに数えられるほどになっている」などと書かれている。射幸心の強さが県民性、などと言われても県民の皆様は嬉しくもなんともないだろうが、少なくとも馬との縁が深い地域であることだけは間違いない。

そんな背景をもって、高崎競馬場は一九二四（大正十三）年に開設された。同年十月に第一回の競馬を開催し、翌年から春・秋の二回開催が続く。馬好きの県民性のおかげかどうか、すぐに人気を確かなものになっている。戦前のピークは昭和初期。一九三五（昭和十）年春開催の有料入場者数は五万六一八七人に及んでいる。

戦時中の休止を経て、戦後は県営競馬として再開する。同じ群馬県に戦前からあった館林・伊勢崎

の競馬場が廃止されたこともあって、群馬県内唯一の競馬場としてますます人気を集めた高崎競馬場。一九四八（昭和二十三）年以降、前橋市や伊勢崎市、太田市なども主催者に加わっている。

競馬が再開してからもない一九四七（昭和二十二）年、高崎競馬場を舞台に「シンシン事件」というトラブルが起こっている。顛末をかいつまめば、八百長の指示に従わなかった騎手と馬・シンシンを暴徒が日本刀で斬りつけたという事件だ。

もともと世情が不安定な終戦直後。人手不足もあって、高崎競馬の警備には地元のヤクザもかり出されたという。そんなことがまかり通っている時点で公正競馬など怪しいものだが、時代が時代だから仕方がない。

八百長を企んでいたのは東京のヤクザで、地元・高崎のヤクザにしてみればヨソ者に八百長をやらせては顔が立たない。競馬場には東京のヤクザと高崎のヤクザが集結し、不穏な空気を醸していたという。そんな状態で競馬を開催するほうも問題なのだが、それもまた時代のなせる業。終戦直後、まだまだ世情が不安定だった頃的一幕である。

ともあれ、機業（織物業）という一大産業があったことも後押ししたのでろう。高崎競馬場は繁栄を謳歌する。同じ北関東にあった宇都宮・足利の競馬場ともに北関東三競馬場として連携し、人気を高めていった。

他にも両毛地域には、前橋競輪・桐生競艇・伊勢崎オートと公営ギャンブル場が目白押し。いわゆる「三競オート」揃い踏みであり、「射幸心の強い県民性」もあながち間違いないのかもしれない。